

中国仏教の仏性論

古賀英彦

〈翠竹黄花〉

神会遺集に次のような問答がある(二三九頁)、

牛頭山ごうざんの袁禪師問う、仏性は一切処あまに遍ねきや。

答う、仏性は一切有情に遍ねきも、一切無情には遍ねからず。

問う、先輩の大徳言わく、青々たる翠竹は尽く是れ法身にして、鬱々たる黄花は般若に非ざるは無しと。今は何が故に言う、独り一切有情に遍きも、一切無情には遍ねからずと。

答う、豈あに將青々たる翠竹は功德法身に同じく、鬱々たる黄花は般若の智に等しからんや。若し青竹黄花は法身般若と同じと言わば、如来は何経中に於いて青竹黄花の為に菩提の記を授けしや。若し、青竹黄花は法身般若と同じと將わば、此は即ち是れ外道の説なり。何を以ての故ぞ。涅槃經1に、無仏性の者は所謂る無情物是れなりと云うが為なり。

有情にしか仏性を認めないとする神会の立場は、禪宗内部においては一般的であるけれども、中国仏教全体としては、むしろ先輩の大徳が主張するように、無情物にも仏性を認める方が主流である。たとえば摩訶止観に「一色一香無非中道(一色一香も中道に非ざるは無し)」(大46―1c)とあることは周知のところである。この「中道」について止観輔行弘決一之二は次のように解説する(大46―151c)。

山家教門よりして明らむる所の中道は、唯だ二義有るのみ。一に断常を離すること、前の二教に属す。二には仏性なること、後の二教に属す。仏性中に於いて教は権実ごんじつを分つ、故に即と離と有るも、今は即義ごんぎ（事理不二）に従う。故に色香無非中道と云う。^③

中道は仏性を意味する。したがってこの一句の主旨は、前の大徳の言うところと同じである。この大徳の言うところについて、祖庭事苑に面白い考証がある。巻五の「翠竹黄花」の項にいう。

道生法師説わく、無情にも亦た仏性有り、と。尸して云わく、青々たる翠竹は尽く是れ眞如にして、鬱々たる黄花は般若に非ざるは無し、と。世に信ずる者少くして謂く、仏語の所證無し、と。

法師は乃ち端坐すること十年、経を待ちて證せんとす。後に三藏の涅槃の後分の経を帯びて至るに、果たして斯の説有り。法師は覽畢みおひつて、塵尾地に墜ち、几に隠れて入滅せり。

一見して明らかなとおり、これは例の闡提成仏説をめぐる一件④を換骨奪胎した説話である。さらに祖堂集十五の帰宗和尚章では僧肇の語とされるから、両者の仏教史上の地位を考えれば、無情仏性の説がいかに中国仏教に本質的であつたかを物語るであろう。

〈仏語二非ズ〉

ただ「仏語の所證無し」といわれるように、インド仏教にはなかつた考えである。仏教が中国的に変容した結果であることはいうまでもない。しかし仏性論の構造そのものに変化があつたのではない。旧稿⑤にも引用した金光明経の偈の言葉（大16—三四四b）、

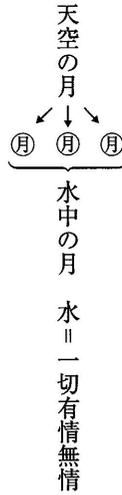
仏の眞法身は猶お虚空の如し。物に応じて形を現わすこと水中の月の如し。

これにもとづいて作つた図式によつて説明するならば、次のようになる。

インド仏教



中国仏教



月はむろん仏性の譬えである。すなわちインド仏教においては、仏性は、衆生身中のみ宿るのであるが、中国仏教においては、一切万物に宿るのである。個々の衆生中のみならず、個々の事物中にも宿るのである。そのさい天空の月が一つ一つの水に全体まるごと映るように、仏性もまた全体まるごと宿るのである。この「全体まるごと」という点において、東西の仏性論に変わりはない。ただ性能の持たせ方に違いが生じるのである。いわゆる眞如の不変隨縁の問題なのであるが、織田仏教辞典「隨縁眞如」の項に見事な解説があるので、それを拝借することにしよう。

〈不変隨縁〉

法相三論の如き權大乘には眞如凝然不作諸法と立て、万物の本体は眞実如常にして、不変不動なり、此の不変不動の眞如を所依として因縁の事相安立すと云ふ。されば眞如は体、万物は相にして、体と相とは所依畢竟不離なれども、彼此本来各別なるは木と石を合わせたる如し。

「權大乘」というのは、実大乘という言葉に対するもので、中国の仏教徒が、未だ完全なものではないという意味

を込めて、インドの大乗仏教を指すのに用いる言葉である。自らの優越性を意識していることはいうまでもない。「眞如凝然不作諸法（眞如は凝然として諸法と作らず）」という語の出所を、残念ながら私はまだ確めていない。

然るに華嚴天台の如き実大乘に在ては、眞如に二相を立てて一は不變眞如、二は隨縁眞如とし、不變眞如の辺には彼の権大乘に言ふ所の如くなれども、眞如は不變の一边に止まらず、更に隨縁の用ありて外来の縁に応じて森羅万象を現ずること猶ほ不變の水が外縁の風に依つて千波万波を起す如しと云ふ。

其の起したる波は猶ほ水の性を失はざる如く、森羅万象の事相は猶ほ不變の眞如性を変ずることなし、故に万法即眞如にして眞如即万法なり。即ち眞如は縁に隨ふ徳あるを以て眞如即万法なり、而も眞如は不變の性を具するを以て万法即眞如なり。

「実大乘」の眞如は「森羅万象」となつて現われる点で、権大乘の場合とはおおいに異なるわけである。

中国仏教において眞如は仏性の異名の一とされる。吉蔵の大乘玄論三に次のようにいう（大45—四一c）、

經中に仏性を明らかにすること有り。法性、眞如、實際等は並びに是れ仏性の異名なり。何を以て之を知るや。涅槃經自ら説くらく、仏性に種々の名有り、一仏性に於いて亦た法性・涅槃と名づけ、亦た般若・一乗と名づけ、亦た首楞嚴三昧・師子吼三昧と名づく、と。故に知る、大聖は隨縁善巧にして、名を説くこと同じからず。

さらに数個の異名を挙げた上で「一法中に於いて無量の名を説き、一名中に於いて無量の門を説く。是の義を以ての故に、名義は異なると雖も理実は無二なり」としめくる。つづいて問いを設けて「若し理実は無一ならば、何の義を以ての故に種々の名を説くや」といい、答えて「若し名に依りて義を釈せば、所以無きには非ず」としてそれぞれの名の起こる由来が述べられる。その中で「諸法の体性と爲るを法性を爲す」（四二a）というのが、今の問題である眞如の不變隨縁とかかわりを持つ。

〈肇論〉

しかるに言葉はないけれども、不変の眞如が随縁して諸法となるという考えはすでに肇論にある。というより肇論に始まる。肇論の基本的立場を表明する「即偽即眞」(大45―153b)という言葉は、「眞」の字を眞如に読み換えればそのまま「万法即眞如」の意となる。「偽」とは大乗起信論に「三界虚偽、唯心所作」(大32―1577b)というところの「虚偽」に同じで、万法は妄想の産物であって眞実ではないという意味である。それを僧肇は眞実だとするのである。

肇論の主題は「不動之作(不動のものが不動のままになすはたらき)」(大45―151a)ということである。その主体は法身である。

經に曰わく、法身は無象にして、物に応じて而して形かたちわる。般若は無知にして、縁に対して而して照らす。

(一五八c)

經に云わく、甚だ奇なり、世尊よ眞際を動かさずして諸法の立処と為る。(一五三a)

放光に云わく、等覺を動かさずして而も諸法を建立す。(一五三b)

応化は無方にして、未だ嘗つて為すこと有らず。寂然として不動にして、未だ嘗つて為さずんばあらず。

(一六〇c)

夫れ至人は空洞無象にして而も万物は我が造に非ざるは無し。万物と会して以て己と成す者は、其れ唯だ聖人のみなるか。(一六一a)

「法身無象、応物而形」というのは、前に引用した金光明經の偈文の意を取って言い換えたものに違いない。さらに法身の意味もすでに変換されている。僧肇が經論を引用する場合はしばしばこういうやり方をする。それはインド仏教にはない考えをもとに、新たな仏教学を構築しようとすることに伴う止むをえない作業であったであろう。僧

肇は、中国思想としての仏教を生み出したのである。これはのちのちに受け継がれ、やがていわゆる宋学に影響を与えることになるが、それもやはり、僧肇の仏教学が中国的思惟に深く根差した体系であったからであろう。

いま問題としている眞如が随縁して諸法となるという考えは、右に挙げた文の中の「寂然不動、未嘗不為」「夫至人空洞無象而万物無非我造」という語句に見て取ることができよう。とくに「万物は我が造に非ざるは無し」「(万物は我の造化でないものはない)の一句は、一個の原理的なものから万物が生々変化するとする中国的世界觀の表明以外の何物でもない。有名な「天地与我同根、万物与我一体」(二五九b)というのも同様である。

さらに、「寂然不動、未嘗不為」という句は、すぐに老子の「道は常に無為にして而も為さざるは無し」という言葉を思い起こさせるであろう。これは一個の原理的なものはたらしき^⑤について言われているのであるが、僧肇は何度も引用している。

〈宇宙論的原理としての仏性〉

さてこの僧肇が取り上げた一個の原理的なものを座を、どういう経路で仏性という概念が占めるようになったのか、あとを辿るのははなはだ難しい。しばらく古い時代にまとめられた仏性論を見てみるしかない。浄影寺慧遠の大乗義章卷一仏性義に次のようにいう(天44—四七二a)、

第一釈名、仏なる者は是れ其れ中国(インドを指す)の言にして、此に翻じて覺と名づく。妄を返して眞に契い、実を悟るをば覺と名づく。仏を挙げて性を樹つ、故に仏を明らむるなり。言う所の性なる者は釈するに四義有り。

一には種子因本の義なり。言う所の種なる者は、衆生は自ら実如来藏性にして、大覺を出生し、仏の与に本と為れば、之を称して種と為す。種とは猶お因なるがごとし。故に経に説きて言わく、云何んが性と名づくる。

性なる者は謂う所は可禪菩提の中道なる種子なりと。大智論中にも亦た云わく、性なる者は本分なる種なり。黄石中に所有の金性、白石の銀性の如く、一切衆生に涅槃性有り。斯の文に顕らかなり。

「種子因本之義」というのは、宝性論にいう仏性の三種実体—法身・眞如・種姓のうち、種姓に当る。種姓は血筋であつて、仏の血筋が仏を生むという仏性思想の要であるが、インド仏教では有情に限るものであつた。しかるにここでは、智度論の「法性」に関する教説を引いて、無情物にも広げようとしている。「法性」というのは前に見たとおり諸法の体性（自体の本性）のことであつた（5頁）。金性や銀性など無情物の素性をも意味するのである。

二には体の義をば性と名づく。体を説くに四有り。

一、仏の因の自体を名づけて仏性と為す、謂わく眞識心なり。

二、仏の果の自体を名づけて仏性と為す、謂う所は法身なり。

第三、通じて仏因仏果の同一覚性なるに就いて、名づけて仏性と為す。∴因果は恒に別なるも、性体は殊ならざるなり。

此の前の三義は是れ能知性にして、周りて衆生に就き、非情には通ぜざるなり。

第四、通じて諸法の自体を説く、故に名づけて性と為す。此の性は唯だ是れ諸仏のみの窮むる所にして、仏に就いて以て諸法の体性を明らむ。故に仏性と云う。

此の後の一義は是れ所知性にして、其の内外に通ず。斯れ等は皆な是れ体の義を性と名づくるなり。「眞識心」というのは眞識・眞心と同じで、慧遠の属する地論宗においては第八阿梨耶識の別名とされる。

中国仏教の形成において、肇論と共に大きな役割を果たしたのは大乘起信論である。前者が教理の内容を与えたのに対し、後者は表現の形式を与えたといえるであろう。

阿梨耶識（＝阿頼耶識）について起信論は次のようにいう（大32—五七六）、

心生滅なる者は、如来蔵に依るが故に生滅心有り。謂う所は、不生不滅なるもの生滅するものと和合して、一に非ず異に非ざるとき、名づけて阿梨耶識と為す。

「如来蔵」というのは、論に「眞如の自体相なる者は…名づけて如来蔵と為し、亦た名づけて如来法身と為す」(五七九 a) というように眞如にほかならない。この不生不滅の眞如が、生滅する無明の妄念と和合したとき阿梨耶識と呼ばれる。この阿梨耶識を基体として、衆生の心の生滅が織り成す世界が展開する。いわゆる心眞如門に対する心生滅門で、前に引いた「三界虚偽、唯心所作」の世界である。このさい起信論においては、無明と眞如とは一体でもなければ別体でもないといわれているから、眞如と阿梨耶識とを無媒介に等置してはいない。なぜなら阿梨耶識は無明なしには有りえないが、眞如は無明とはどこまでも無縁だからである。この点において、起信論はインド仏教の範圍に在るといえる。

〈眞如の変容〉

しかるに中国仏教は両者を等置する。これは、万物を生成するのは一個の原理的なものであるとする、中国的世界観の要請に従った結果である。いわばインド仏教が眞如と阿梨耶識との二元論であるのに対して、中国仏教は眞如の一元論であろうとするのである。ではなぜ阿梨耶識と等置する必要があったかといえば、海東疏(大44—二〇八 c)に、眞如門には能生の義無きを以ての故に、今、此の識(阿梨耶識)に於いて亦た生の義を説く、生滅門中に能生の義有るが故に。

というように、眞如の不備を補うためであった。賢首義記にいう(大44—二四三 c)。

此の宗の中には如来蔵(＝眞如)隨縁して阿頼耶識と成ることを許す。

「隨縁」¹⁵⁾とは無明の妄念にしたがうことである(不守自性)。かくして始めて眞如は万物を生成する宇宙論的原理た

りえたのである。

「能知性」については次のようにいわれる（大乘義章一、大44―四七二c）。

能知性なる者は謂わく眞識心なり。此の眞心は覺知の性なるを以て、無明と合して便ち妄知を起こすも、無明を遠離すれば便ち正智と爲る。

若し眞心なる覺知の性なる者無くんば、終に妄知無く、亦た正知無からん。草木等の如し、智性無きが故に。

此の能知性は局りて衆生のみに在りて非情には通ぜず。故に經（涅槃經三六）に説きて言わく、非仏性（との對比）の爲に仏性を説く。非仏性なる者は、謂う所は一切の牆壁瓦石なり、と。

能知性は心法にのみかわる。これに對して「所知性」は色法にもかわるのである。

所知性なる者は謂わく如・法性・實際・実相・法界・（法經）・第一義空・一実諦等なり。經中に説くが如し、第一義空を名づけて仏性と爲す、と。或いは言わく、中道を名づけて仏性と爲す、と。是くの如き等の言は、當に知るべし皆な是れ所知性なりと。

此の所知性は内外に該通す。故に經に説きて言わく、仏性は空の如く一切處に遍ねし、と。

「如・法性・實際…等」は皆な、前に引用した文の中に「第四、通じて諸法の自体を説く、故に名づけて性と爲す」というところの、「通じて諸法の自体を説く」言葉であり、仏性の同義語である。經中に説く「第一義空」「中道」については、涅槃經二七に見える。しかし「仏性は空の如く一切處に遍ねし」という語句は今のところ在所を確めていない。あるいは「仏性は猶お虚空の如し」（大12―五八一a）という語を指すのであろうか。

「内」とは有情を、「外」とは非情を指す。¹⁶前に引いた文の「此の性は唯だ是れ諸仏のみの窮むる所にして」というのは、諸仏のみが実践的にきわめた道理であつて、經論に書かれている事柄ではないという含みであらう。祖庭事苑の逸話にいう「仏語の所證無し」の消息と呼応する認識であらう。

「仏に就いて以て諸法の体性を明らかに、故に仏性と云う」というのは、仏に即して諸法の体性つまり法性を明らかにしているから、その法性を仏性と呼ぶのであるという意味であるが、宝性論の仏性に関する十種義位を引いて解説するところを参照せねばならない。(大44―四七四c)

初めに体性なる者は、論の釈に三有り。

一には如来藏、染時(凡夫の位)の体なり。

二には法身、淨時(仏菩薩の位)の体なり。即ち前の藏体の顯われて法身と名づくるなり。此の二は唯だ衆生にのみ就いて以て説く。

三には眞如の体にして、旨は染淨内外の諸法に通じ、体は融して一味なり、故に説きて如と為す。

義に従つて体を辨ずれば、名は乃ち無量なるも、且よらく隱(如来藏)顯(法身)理実(眞如)に隨つて三を論ず。此の三(仏性)は乃ち是れ諸法の体なり、故に体性と名づく。

仏性は如来藏、法身、眞如の当体であり、一切諸法の体性つまり法性である。そのうち眞如の当体である仏性は染淨内外に通じるとするのであるが、宝性論自体は、眞如は染淨に通じて不変であるとは言っていないけれども、内外に通じるとは言っていない。中国仏教は、眞如の概念を変化させ、それを媒介として法性と等置することによって、仏性を非情物にも通じるものとしたのである。¹⁸その際、法性と等置された仏性は「理性」と呼ばれるようになった。「若し、理性を説かば、性は内外に通ず。彼の内外の相に約して弁ずると雖復も、而も体は平等にして非内非外なり」(大乘義章一、大44―四七六b)

大乘義章はいう、

末を撰して本に従わしめ、虚を会して実に入らしむれば、一切諸法は皆な是れ仏性眞心の所作なり。夢中の事の皆な報心の作なるが如し。此の分中に於いて、能起の心の変じて諸相と為るをば、説きて眞識と為す。一切法

は眞の所作なるを以て、故に涅槃に宣説すらく、一切諸法は悉く是れ仏性なり、と。(五二六a)

末を廢して本を談ずれば、心性は本淨なるも縁起して無尽法界を集成す、是れ其の眞識なり。(同)

仏性は三乘無漏を縁起す、之を名づけて善と為す。(四七六a)

仏性は縁起して我人を集成す。…又た能く縁起して一切法を生ずるを名づけて非無と為す。而も体は常寂なれば、稱して非有と曰う。(五二七a)

〈体用論〉

不変不動の眞如仏性は、隨緣縁起²⁰して一切法となる。では不動のものが不動のままにどうやって一切法となりうるのか、といえば、それはこれも中国思想に特有の体用の論理によるからである。

眞に体用有り。本淨の眞心は之を説きて体と為す。隨緣して隱顯するをば説きて以て用と為す。用は必ず体に依れば之を名づけて依と為す。体は能く用を持せば説きて以て持と為す。能持は水の如く、能依は波の如し。(五三二a)

体用の論理とはどういうものかというのと、一個の宇宙論的原理から万有が生じるからくりを説明したものである。すなわち、不変の眞如(理)が隨緣して全体まるごと一切法(事)に宿ることによって、一切法をして一切法たらしめているということである。森羅万象の一個々々が個性を持ちうるのは、眞如(体)のはたらき(用)だとするのである。一色一香も中道に非ざるは無しというのもここを指すわけである。

金剛鐔にいう(大46―七八二c)、

一 方法は是れ眞如なり、不変に由るが故に。眞如は是れ方法なり、隨緣に由るが故に。

眞如を黄金にたとえるならば、黄金は職人などの縁に隨つて——隨緣して——種々の器となつても、金であること

においては変らない。不変である。だから種々の器（万法）はすべて黄金（眞如）である。世界は眞如仏性であり、「草木国土悉皆成仏」というのが、中国的仏性論の行きつくところである。

註

- (1) 涅槃經三七にいう「非仏性なる者は、謂う所は一切の牆壁瓦石、無情の物なり。是くの如き等の無情の物を離れて是れ仏性と名づく」（大12―五八一a）。
- (2) 馬祖門下の大珠慧海は無情仏性を認めない。伝灯録二十八 大珠慧海語参照。しかるにこれに先だつ南陽慧忠は容認する。祖堂集卷三 慧忠章参照。また牛頭宗にも草木成仏を認める記事がある。絶観論参照。
- (3) 止観輔行は続けていう「此の色香等は世人咸な謂わく以て無情と為すと。然れども亦た共に色香は中道なりと許す。無情仏性は耳を感わし心を驚かす。今且に十義を以て之を評し、理に於いて感わざらしめんとす。云云」。
- (4) 高僧伝七 竺道生章参照。
- (5) 「図説インド仏教の仏性論―宝性論研究ノート―」（『禅文化研究所紀要』31号）
- (6) 「無二」とは唯一ということである。仏性は、天空の月のように唯一の存在である。それが森羅万象となつて現われるというのが、中国仏教の仏性論である。
- (7) なおこの句の理解の仕方については、旧稿「動中有静論考―肇論と中国仏教（序）―」（『禅学研究』八十九号、平成二十三年三月）参照。
- (8) 元康の肇論疏下（大45―二〇〇a）にいう「此の論の凡そ引く所の経に乃ち二体有り。一には名を標し、二には名を標せず。標する者は是れ経の全文（きちんとした文章）なり。標せざる者は諸経の大況（あらし）なり。未だ必ずしも全くは然らざれども、多く此くの如きなり」。
- (9) 涅槃無名論の「施すこと之より広きは莫し、故に乃ち無名に帰る」（大45―一五八c）という句に対する惠達疏の解説に「無為の道は通じて万物を生ずることを為して、而も持して其の功を顕わさざるなり」（中統藏經一五〇册八四七上）とある。
- (10) 大般涅槃經二十七（大12―五二三c）
- (11) 智度論三十二（大25―二九八b）。ただ智度論で

は仏性についてではなく、法性について述べていることに注意。同じ巻の別の場所では「法性なる者は前に説きしが如く、各々法空にして、空に差品有るを是れ如と為し、同一空為るを是れ法性と為す」(二九七c) というように、智度論の法性は空性を指す。大乘義章二(大44―四八八a)にも引用されている。

(12) 涅槃經二八の正因仏性について述べるところにいう「世尊よ、瞿曇姓は稱して阿坻耶姓と為すことを得ず、阿坻耶姓も亦た瞿曇姓を稱することを得ざるが如く、尼拘陀子も亦た復た是くの如し、稱して佉陀羅子と為すことを得ず、佉陀羅子は稱して尼拘陀子と為すことを得ず。猶お世尊は瞿曇の種姓を捨離することを得ざるが如く、衆生の仏性も亦た復た是くの如し。是の義を以ての故に当に知るべし、衆生は悉有仏性なり」と。世尊が瞿曇の血筋をはなれないように、一切衆生は仏陀の血筋をはなれることはできないというのである。

(13) 「阿梨耶なる者は、此の方に正翻して名づけて無没と為す。生死に在りとも雖も失没せざるが故なり。義に隨つて傍翻するに、名は別に八有り。一に藏識と名づく、如来の藏は此の識と為るが故に。二に聖識と名づく、大聖の用いる所を出生す

るが故に。三に第一義識と名づく、殊勝なる以ての故に。四に淨識と名づけ、亦た無垢識と名づく、体は不染なるが故に。故に經(勝鬘經)に説きて自性淨心と為す。五に眞識と名づく、体は妄に非ざるが故に。六に眞如識と名づく。七に家識と名づけ、亦た宅識と名づく、是れ虛妄法の所依の処なるが故に。八に本識と名づく、虛妄心の与に根本と為るが故に。」(大44―五二四c)

(14) 法藏の大乗起信論義記にいう「又た阿梨耶及び阿頼耶なる者は、但だ梵言の訛なるのみ」(大44―二五五c)

(15) 淨影疏にいう「謂う所の不生不滅とは其の体の常住なるなり。隨縁して妄と成るも而も体は無常なるには非ず。上に説きしが如し。此の一句は正に体の常なることを表わす。生滅と和合しとは、隨縁して、妄をして和合して一なるが如からしむるなり。此の一句は妄に隨うの義を明らむ。一に非ずとは、性の常住なるが故なり。異に非ずとは、和合せしむるが故なり。此の二句は隨縁の相を辨ずるなり」(大44―一八二c)

(16) 「内外と言う者は、義もて両門に別る。一には相に隨つて以て分かち、二には情理相対す。相に隨うと言う者は、衆生を内と為し、山河大地非情

物等、之を以て外と為す。若^も当^じ彼の因果の性を説かば局りて衆生に在り、是れ内なりと言うを得。若し理性を説かば、性は内外に通ず」(大44—四七六b)。所知性は理性とも呼ばれる。

(17) 「十種義有り、此の十種に依りて、第一義実智の境界たる仏性の差別を説くと応に知るべし」(大31—八二八b)

(18) 仏性と法性との関係をめぐっては金剛鐔に次のような議論がある(大46—七八三a、b)、
 是に於いて野客は恭しく退き、呉跪して諮りて曰わく、僕は曾つて人の大智度論を引いて云うを聞けり、眞如は無情中に在りては但だ法性と名づくるのみにして、有情内に在りて方めて仏性と名づくと。仁は何が故に仏性の名を立つるや。

余曰わく、親しく曾つて委読細檢せしに、論の文には都べて此の説無し。或いは恐らく謬りて章疏の言を引きて、世よ共に之を伝えしならん。眞如隨縁は即ち仏性隨縁なり。仏の一字は即ち法仏(法身仏)なり。故に法仏と眞如とは体は一にして名の異なるのみ。故に仏性論第一に云わく、仏性なる者は、即ち人法二空所顯の眞如なり、と。当に知るべし、眞如は即ち仏性の異名なることを。故に知る、法性の名は無情中の眞如に専らに

せざることを。

(19) 涅槃經の言葉は未だ検出しえていない。

(20) 四論玄義七にいう「地論師云わく、分別して之を言わば三種有り。一には是れ理性、二には是れ体性、三には是れ縁起性。隱の時には理性と為し、顯の時には体性と為し、用の時には縁起性と為すなり」(中統藏經七四册九三上)

(補注) 吉藏の大乗玄論(大44—三五b)に十一家の仏性説を挙げて、一つ一つ破洗するのであるが、そのうち二家は「色法」を仏性とし、五家は「心法」を仏性とし、残る四家は「理」を仏性とするようである。色法でもなく心法でもなく、しかも両者に通じうる存在として、「理」という概念は、古くから中国仏教において重宝されている。中国思想においては宇宙論的原理を表わす言葉として知られている。